

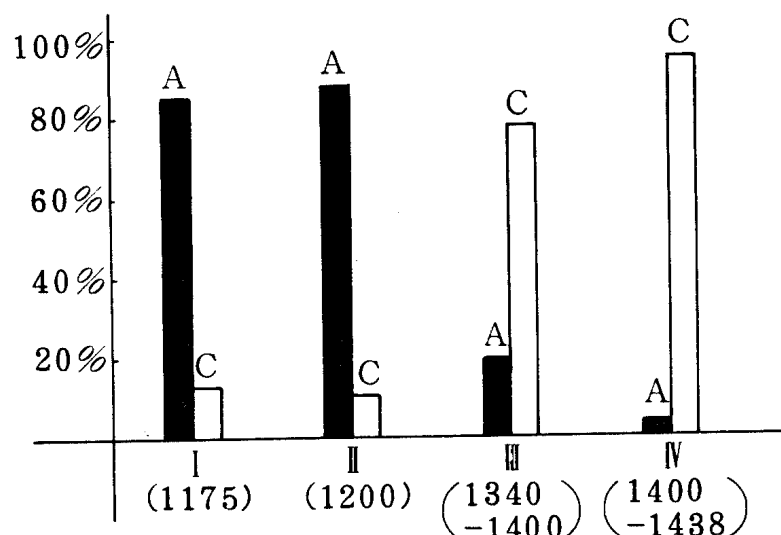
A型文は9例を数えるのみである。コーパスの量的な不十分さを差し引いて見てもIV期、つまり、15世紀前半には there 存在文は存在表現形式として確立し、一般的となったと考えられる。特に本稿では there 存在文を Loc.との共起が見られるものに限ったことからしてこの there 存在文の比率の伸びはここで表示された数字よりも実際はもっと大きな変動を基盤にしたものであるということ
を考慮すべきであることは言うまでもない。因みに Breivik の研究でも、彼の判断によっていわゆる there 存在文と判定された存在文は、そこで第2期
(1070-1225) と呼ばれる時期から第3期 (1225-1425) にかけて、その占めるパーセンテージが飛躍的な伸びを示している¹⁾。

1) Breivik, p.322.

C型存在文は第1期と第2期では全部で18例見られる中で、3例のみが従属節に現れるだけであとはすべて主節であるといった偏りが見られる。これは単に従属節そのものの頻度が低いことにも起因するかも知れないが、特に文の冒頭に置かれた E. there には少なくとも初期の段階では単なる存在文の一形式に止まらず、A. there のもつ指示性の延長線上にある導入的要素、あるいは Nagashima の言う ‘demonstrative and/or evocative’ 的な要素をまだなお一部引きずっているとも考えられる¹⁾。その前提に立てばそれは主節において、より強く働くことは肯ける。この問題に関しては稿を改めて考えてみたい。

さらに上の表の時期別の小計をグラフに表してみると次のようになる。

A型構文とC型構文の比率の推移



前述のようにコーパスとしたテキストを便宜上、4期に分けて考察したが、これは必ずしも等間隔に時代区分されるものではない。II期とIII期の間が最も長くなっているが、これは意図的なものではなく、散文のテキストという制約もあってこのようになったものである。しかしながら、このII期とIII期との間で、A型構文とC型構文との頻度の比率が劇的に逆転している。即ち、13世紀から14世紀にかけて there 存在文が飛躍的に普及、発展したのに対してA型文は急速に衰退しIII期からIV期にかけて、さらに一段と減少している。実数を見てもIV期の両テキスト合わせて525頁の中で、C型文が183例の多きに達するのに対して

1) Cf. D. Nagashima (1972他)。

but now pere is not but a lytill village t houses a brood here t pere.
 (Mandev. 74) / And pere is more plente of people pere pan in ony oper
 partie of ynde for bountee of the contree. (Mandev. 135)

特に前者での 'here t pere' という Loc.との共起は注目される。いずれも *Man-*
*dev.*からのものであるが、*MKempe* ではこの種の文は見られない。

6.0. む す び

以上、中世英語におけるA型、C型の二つの存在構文に関してその諸相を見た。これらの構文のテキスト別の頻度を表にすると次のようになる。

頻 度 表

		A 型				C 型				総 計
		MC	SC	計	小 計	MC	SC	計	小 計	
I	<i>HRood</i>	3	1	4	29 (85.3%)	1	0	1	5 (14.7%)	34
	<i>Bod. Hom.</i>	20	5	25		4	0	4		
II	<i>Trin. Hom.</i>	20	1	21	96 (88.1%)	1	0	1	13 (11.9%)	109
	<i>Vices</i>	6	0	6		1	1	2		
	<i>Ancr.</i>	38	18	56		2	1	3		
	<i>H. Maid.</i>	2	1	3		1	0	1		
	<i>St. Marg.</i>	1	0	1		1	1	2		
	<i>St. Jul.</i>	1	0	1		0	0	0		
	<i>St. Kath.</i>	7	0	7		2	0	2		
	<i>S Ward</i>	1	0	1		2	0	2		
III	<i>Ayenb.</i>	7	0	7	24 (20.2%)	6	13	19	95 (79.8%)	119
	<i>Rolle</i>	1	0	1		3	0	3		
	<i>Chaucer</i>	5	4	9		31	25	56		
	<i>LondonE.</i>	1	1	2		0	1	1		
	<i>Cloud</i>	2	3	5		7	8	15		
	<i>Privy</i>	0	0	0		0	1	1		
IV	<i>Mandev.</i>	5	1	6	9 (4.7%)	89	26	115	183 (95.3%)	192
	<i>MKempe</i>	1	2	3		36	32	68		

for sum tyme per was a kyng in pat contree (*Mandev.* 102) / But in pat contree pere is a cursed custom (*Mandev.* 119) / Anoper yle is pere toward the north in the see OCCEAN (*Mandev.* 190) / Per is no clerk in al pis world pat can, dowtyr, leryn pe bettyr pan I can do (*MKempe* 158) / Dowtyr, per is no so synful man in erth leuyng. . . (*MKempe* 23) / for per ros no wawe on pe watyr (*MKempe* 232) / And per sche cam in-to a fayr cherch (*MKempe* 111)

次の (*MKempe* 123) の文は、この場合 there と ‘in 3orke’ に関して、とり方によっては「同一節」という条件からはずれるが、注目すべきは現代英語において、E. there 存在文に特に一般的である、contact clause が見られることである。*MKempe* にはこの他にも数例の contact clause を含む C 型構文が見られる。

There was a monk xuld prechyn in 3orke (*MKempe* 123)

また次の文では文頭位の pere のあとに接触して Loc. が続いているが、PE の感覚からすればこの pere は後続の Loc. の導入・先駆け的な役割を担っている、かなり副詞的色合いの強い pere と解される。

And pere betwene the mount Olyuete t the mount Calilee is a chirche. . . (*Mandev.* 65)

次の (*Mandev.* 30) と (*Mandev.* 141) は過去分詞を伴った there 存在構文であり、特に後者は受動態を形成している。

In pat cytee pere is a temple made round after the schapp of the temple Ierusalem. (*Mandev.* 30) / And all about per is ymade large nettes of sylk t gold t grete perles hangynge all about the mountour. (*Mandev.* 141)

第 3 期に初めて現れ、E. there の成熟度を知る一つの客観的な方法と考えられる E. there と A. there が同時に同一節に現れる文が、ここでも見られる。

これは Loc.との共起が見られない文でここでは直接の考察の対象からはずれるものであるが、興味深いのはこれは会話部分で、省略された形であり、また be 動詞存在文ではないが、文の主語の NP を欠き、there が、いわば、動詞に対する ‘prop word’ 的な役割を果たしているということである。このような現象は現在全く普通であるが、それは E. there が形式主語の機能をはたしていることによる。その意味でこのパターンがこの時期に見られるということは、there がすでに主語的性格を持っていることを物語っているものと言えよう。

(Chaucer M. 1866) は ‘Let there be...’ が期待されるところであるが、まだそのような段階にまでは達していないというところであろうか。

5.0. 第 4 期

この時期では A 型構文による存在文の比率が 4.7% とさらに低下するのに対して、C 型構文のそれは逆に 95.3% とまた一段と増大の傾向を示している。そしてこの時期に括った二つの作品のうち、*MKempe* における C 型構文の著しい高頻度が特徴的である。

5.1. A 型存在文

Mandev. はその旅の見聞録といった内容から、当然、全体的に存在を表す文が頻出するが、その中でこの A 型文によるものは僅かの 6 例にすぎない。*MKempe* では 3 例を数えるのみである。このことから、この時期 E. there 存在文の地歩がほぼ固まったと行うことができよう。

Manye oper merueylles ben in pat cytee t in the contree pere aboute. . .
(*Mandev.* 138) / And many oper dyuerse bestes ben in po contrees t
ellwhere pere abouten (*Mandev.* 194) / Neuyr-pe-les wherso-euyr God
is Heuyn is, & God is in pi sowle & many an awngel is abowte pi sowle
to kepe it bope nygth & day (*MKempe* 31) / as a worschepful doctowr
of diuinite was in pe pulpit & seyde pe sermown (*MKempe* 185)

5.2. C 型存在文

このパターンは *Mandev.* に 115 例、*MKempe* に 68 例で、第 3 期に比して構文内容の多様化がさらに進む。

panne per nys prowessse arizt : bote ine godes kny3tes (*Ayenb.* 83) /
 ‘Allas’ zayp saynt bernard ‘huet per is hier zor3uolle yelpinge.’ (*Ayenb.*
 59) / . . . pet ine pe oprisinge ne ssel by non spousynge as per is hyer.
 (*Ayenb.* 227) / two maner of states ther bene in holy chirch (*Rolle*
 21) / 3it es per a dyuersite by-twix gastely & bodily dedis ; (*Rolle* 37) /
 Also, 3if per be in bretherhede eny riotour, oper contekour, oper
 such. . . (*LondonE* 46) / what difference thanne may ther be bytwixen
 that that God doth and the hap of fortune (Chaucer B. Bk IV, Pr 5,
 37) / For certes, if ther ne hadde be no sunne in clothyng (Chaucer P.
 41, 2) / or elles as manye rychesses as ther schynen bryghyte sterres
 in hevene on the sterry nightes (Chaucer B. Bk II, M2, 6) / Wherfore
 I pray yow, lat mercy been in your herte (Chaucer M. 1866) / And
 bytwixen thise two lettres ther were seyn degrees nobly ywrought in
 manere of laddres (Chaucer B. Bk I, Pr 1, 34)

まず、上にあげた (*Ayenb.* 59) と (*Ayenb.* 227) の2例は特に注目に値する。
 hier は場所の副詞の per とは本来相容れない、二者択一的関係にあるものであ
 る。この場合その二つの語が一つの節に同時に現われているということは注目
 に値する。即ち、副詞 per の持つ本来の場所的指示機能はここでは殆ど意識され
 ていないということの強い証明になるであろう。そのような極端な例が、この時
 期に2例も見られるということは上述のA型構文の急激な減少と併せ考えると
 き、E. there 存在構文の定着が、ここで言う第2期と第3期との間で一部かなり
 進んだ証左と見てよいであろう。ただ、同時に前述の (*Ayenb.* 45) のような例
 が出てくるということから考えると、全般的には一部まだ過渡期にあることは
 否めない¹⁾。また、Chaucer では、一段と多様な文がみられるが、特に注目され
 るのは次の文である。

“Forthothe,” quod sche, “thanne nedeth ther somewhat that every man
 desireth ?” “Yee, ther nedeth,” quod I. (*Boece*, Bk III, Pr 3, 41)

1) 因みに Breivik もこのような文はこの時期以前には見られないとしている。
 (Breivik, p.263)

な指示機能を持つ副詞ととるのが妥当であろう。このような例はこの一例のみである。

なお、この時期、there 存在文において、per と hit の混同が見られる。例えば *Trin. Hom.*, *Vices*, *Ancr.* の三作品に 9 例を数えるが、いずれも同一節内の Loc. との共起という条件を満たしていない。即ち、‘hit(=per)+v.+Loc.’ というパターンを持つ存在文は少なくとも今回対象としたテキストには見られない。

4.0. 第 3 期

4.1. A型存在文

第1期、第2期に比べてこの構文による存在文はこの時期、大幅に減少し、代わってC型構文が圧倒的に高い頻度を示し、その比はここで一挙に逆転するが、なお以下のようなA型文が見られる。

A knyght wes pet zuor be godes ezen. (*Ayenb.* 45) / Zom uolk byep pet ne moze ham nazt hyalde stille ne nazt ham loki. . . (*Ayenb.* 255) / swa mekill contricyone was in his herte (*Rolle* 7) / For as moche as rumour and spekyngge is amonges some men of the Citee (*LondonE.* 32) / Moche vanitee and falsheed is in peire hertes (*Cloud* 105) / Som lesynge is of which ther comth noon abantage to no wight ; (Chaucer P.607) / yif we trowe that prescience be in thise thingis (Chaucer B. BkV, Pr. 5, 86)

(*Ayenb.* 45)はパラグラフの冒頭に見られる文で、そこで新たな人物が話の中に導入されるという、いわば、there 存在文が期待される典型的な状況である。*Ayenb.*でもA型存在文との比率が完全に逆転している中で、このような場面にまだなおこのA型存在文が現われる点に注目すべきであろう。

4.2. C型存在文

この時期、A型存在文の凋落とは対照的に大きく頻度を増したこのパターンは、内容的にも多様な変化を示す。

合して一語となり文頭に来るパターンはこの時期までで、第3期以降は見られない。ここで、目につくのは、たまたまそのほとんどの文において、核を成す NP+be の後ろに何らかの語句、あるいは節が付加され、それによって be 動詞を中心とした左右の文体的バランスを保っているように思われることである。この点、特に興味深いのは (*Ancr.* 46) や (*Ancr.* 216) などのいくつかの例で、いずれも主語の NP の一部が be 動詞の後に振り分けられていることである。もしこのようなことが意識されていたとするならば、この時期少なくとも、それだけ語順の固定化が進み文頭の主語領域のもつ特殊性が意識されていたことの証明になるであろう。即ち、このA型構文は、中世英語における一層の語順の固定化に呼応して、いわゆる、‘new information’を文頭に据えることから来る座りの悪さを抱えることになり、加えて、文体的不均衡を生じやすいということから、急速に衰退して行ったというのがこの構文の内側の事情であったのではなかろうか。

3.2. C型存在文

この時期もこのC型のパターンは依然として少なく、全部で13例しか見られない。

nere per nan empti stude i pe heorte to underfon fleschliche lahtren
(*Ancr.* 81) / per is remunge ipe brunne. ant toðes hechelunge ipe snawi
weattres. (*SWard* 251) / for nis per na steuene bituhhe pe fordemde
wumme. (*SWard* 253)

この他に次のような文が見られる。

Her beoð ipeos word twa eadi peawes to noti swiðe zeorne (*Ancr.* 82)

ここでは per と同じような指示機能をもつ副詞 her と具体的な場所を表す副詞句 ‘ipeos word’ とが同一節の中に共起している。これは per と Loc.との共起と同じように考えれば、この her も ‘Existential her’ とでも呼ぶべきものとなる。しかしながら、一般に there に比べて指示性・限定性の強い here が E. there と同様に、意味的にはほとんど ‘empty’ に近い感覚で用いられているとは考えにくく、すぐ後続する Loc.の位置とも相俟って、むしろその Loc.を導く、deictic

2.2. C型存在文

このC型文はこの時期には5例見られるが、そのうちの2例はbe動詞以外の動詞, weorðanである。また1例を除くすべてにおいて主語のNPよりもLoc.が先行している点が注目される。

Ða wæs ðer wiðutæn pam wyrttune an waterput þe wæs to pam swiðlice bitter ðæt. . . (*HRood* 20) / ac ðær wæs bi halfes an swiðe heah clif onemn (*Bod. Hom.* 16) / Ne bið þær on þære heahe eadiznesse sundries huses neod (*Bod. Hom.* 118) / ac ðær wurdon oft æt pam waterscipe monizfealde ceastu 7 monslihtæs (*Bod. Hom.* 16) / 7 þa wearð þær flit betwyx pam synderhalzan (*Bod. Hom.* 60)

3.0. 第 2 期

3.1. A型存在文

この時期このタイプの存在文は *Trin. Hom.* と *Ancrene Wisse* に特に多く、それぞれ全体の95.5%と94.9%の高い頻度を示している。

Fele kinne weldede ben. (*Trin. Hom.* 157) / Mani oðer was ðe more hafde misdon (*Vices* 13) / Affectiun is. hwen þe poht geað inward. (*Ancr.* 149) / Gode religiuse beoð i þe world summe (*Ancr.* 9-10) / Fikeleres beoð þreo cunnes. (*Ancr.* 46) / A mon wes of religiun. (*Ancr.* 216) / ah is an deouenlich gast in hire swa azein us (*St. Kath.* 1317) / is al to muche lauerdom t meistrie prinne (*HMaid* 116) / Grið beo bimong ow. (*Ancr.* 130) / Nis nan ðing mare azeanes Criste (*Vices* 9) / Nis non mihte on godes temple ðæt. . . (*Vices* 111) / Nis nan þ nis dredful. (*Ancr.* 34) / Nis buten an godd (*St. Kath.* 367) / Þis ich segge for þi þ sum licunge is. . . (*Ancr.* 99) / 3ef ei swuch is imong ow. godd turne hire in to floc. (*Ancr.* 131)

(*Ancr.*130) は there 存在文が定着した現在では‘Let there be’の構文をとるところであろう¹⁾。(*St. Kath.* 367) に見られるような、否定辞neとbe動詞が結

1) *Bod. Hom.*には‘Gewurðe liht, 7 þa wæs sone iworden liht ; (100) といった表現も見られる。

が関わってくる可能性があり、これはこれでその観点からの吟味が必要であるが、ここではとりあえず、より自然言語に近いと考えられる散文を考察の対象とした。

以下、便宜上4期に分けたそれぞれの時期についてこの二つのパターンを中心にその詳細を見ていくことにする。

2.0. 第 1 期

2.1. A型存在文

古代英語期においてはこのパターンは、ごく一般的であるが¹⁾、中世英語期においても初期ではまだこの傾向は続き、この時期の2作品に関しては29例が見られ、C型文との比率は圧倒的な優勢を示す。

Twa weorc beoð pare soðan mildsunge (*Bod. Hom.* 34) / An sawul is, 7 an lif, 7 an edwist, þe ðas ðreo þing hæfð on hyre (*Bod. Hom.* 88) / 7 we on him, is us swiðe micel ðearf þæt. . . (*Bod. Hom.* 50) / 7 nis æniz þ him syððan wiðstanden mæze. . . (*HRood* 34) / Witodlice ðreo cyn beoð ælmesse næ; (*Bod. Hom.* 48) / Witodlice æhtæ beoð heafodlæhtræs (*Bod. Hom.* 40) / ac, bi þon heo sædon, sum timæ sceolde beon ær. . . (*Bod. Hom.* 78) / 7 nes nan timæ ne nefræ nane tide, ne nan oðre zesceaft þe. . . (*Bod. Hom.* 78) / Nis nan mon þ æfre þam deofle zeorne ihyre, (*Bod. Hom.* 104) David nis ðe nan neod embe þ to swincenne (*HRood* 14)

上記の (*Bod. Hom.* 34) や (*Bod. Hom.* 88) のように冒頭に NP+be が位置するパターンは、さすがに少ない。多くは、何らかの語句、例えば副詞句、接続詞などが先行する。前述のように、ここでは否定詞 ne が be 動詞と結合して一語となって文頭に位置し、subject NP が続く型も A 型の範疇に入れるが、この型はこの時期少なくはない。(*HRood* 14) では文頭に呼び掛けの語が来ている。

このパターンでは文頭位に来る adverbials は場所、あるいは、時を示すものが多い。

1) Cf. 杉山隆一 'The Origin of the Function Word *There*' 『鹿児島県立短期大学紀要』 No.20, 1969。

(*HMaid*).

Seinte Marherete (ed. F. M. Mack), EETS o.s. 193, 1934 (rpt. 1958) (*St. Marg.*)

Pe Liflade ant te Passiun of Seinte Iulienne (ed. S. R. T. O. d'Ardenne), EETS 248, 1961 (*St. Juliana*).

The Life of Saint Katherine (ed. E. Eickenel), EETS o.s. 80, 1884 (rpt. 1973) (*St. Kath.*).

'*Sawles Warde*' in *Old English Homilies* (ed. R. Morris), EETS o.s. 29 & 34, 1868 (rpt. 1969) (*SWard*).

《Period III (1340-1400)》

Dan Michel's Ayenbite of Inwyt (ed. R. Morris, rev. P. Gordon), EETS 23, 1866 ; rev. 1966, & 278, 1979. (*Ayenb.*).

English Prose Treaties of Richard Rolle de Hampole (ed. G. G. Perry), EETS 20, 1866 ; rev. 1921. (*Rolle*).

A Book of London English 1384-1425 (ed. R. W. Chambers and M. Daunt), Oxford : Clarendon Press, 1931 (pp.1-60). (*London E.*).

The Cloud of Unknowing (ed. P. Hodgson), EETS 218, 1944 (rpt. 1973). (*Cloud, Privy*).

'The Tale of Melibee' (M), 'The Parson's Tale' (P), 'A Treatise on the Astrolabe' (A), 'Boece' (B) in *The Riverside Chaucer* (ed. L. D. Benson), Houghton Mifflin Co., Boston, 1987. (*Chaucer*).

《Period IV (1400-1438)》

Mandeville's Travels (ed. P. Hamelius), EETS 153, 1919 and 154, 1923. (*Mandev.*).

The Book of Margery Kempe (ed. S. B. Meech & H. E. Allen), EETS 212, 1940. (*MKempe*).

対象とした作品はいずれも散文である。散文が即、自然言語であるというわけではないが、韻文は散文に比べると、より多くの文学的技法が加わっていることは否定できない。例えば、Breivik も Chaucer の *General Prologue* からの韻文の例をあげて、E. there の位置が 'rhythmical factors' によって決定されているようだと述べてその介在を示唆している¹⁾。従って、韻文の場合、他の要素

1) L. E. Breivik, p.351.

符の頻出となり、Breivik では自分が明白であると確信できるもののみが考察の対象とされ、従って E. there, A. there どちらとも判じ難いものは対象からはずれることになる。

このような状況のなかで、なんとかより客観的な基準に基く there 存在文の記述ができないものであろうか。前述のように(2)の文では文頭の there は後置された、より具体的な Loc.と重複するため、本来の場所の指示機能はほとんど意味をなさないと考えられる。つまり、この thereこそが E. there であり、この場合、A. there との相違は明白である。ここではこのような形態的に判断可能な E. there に注目して中世英語期の there 存在文の発達を探ってみることにする。従って、その範囲内ではかなり客観的な記述が可能であるが、それは一部限られた部分であることは言うまでもない。いわば、前述の二者の俯瞰図にもうひとつ別の角度からの視点を与えることによってこれを補完することを目的とする。

There 存在文の発達の過程は、また現在ではきわめて限られた文脈にしか現われない A 型存在文の衰退の過程にも投影される。従って、以下この二つの文型についてその消長を対比検討していくことにする。

なお、調査した作品は次にあげる17のテキストであるが、これらを便宜上、年代によって4期に分け、その間における各パターンの変動を見た。なお、各作品の末尾の括弧内の表示はその略号を示す。

Texts :

《Period I (1175)》

History of the Holy Rood-tree (ed. A. S. Napier), EETS o.s. 103, 1894 (rpt. 1973) (*HRood*).

Twelfth-Century Homilies in MS. Bodley 343 (ed. Belfour), EETS o.s. 137, 1909 (rpt. 1962) (*Bod. Hom.*).

《Period II (1200)》

Old English Homilies of the Twelfth Century II (ed. R. Morris), EETS 53, 1873 (rpt. 1973) (*Trin. Hom.*).

Vices and Virtues I, EETS o.s. 89, 1888 (rpt. 1967), & II, EETS o.s. 159, 1921 (rpt. 1967). (*Vices*).

Ancrene Wisse (ed. J. R. R. Tolkien), EETS 249, 1962 (*Ancr.*).

Hali Meidenhad (ed. F. J. Furnivall), EETS o.s. 18, 1922 (rpt. 1969)

ちに見られる¹⁾。

このような *there* の判定にまつわる ambiguity の問題が不可避なかで、その一部とは言え、文型の上からその判断に客観性を与えられるものがある。次に示すように同一の節の中で *there* と場所を表す副詞、もしくは副詞句 (以下 Loc. と略記) とが共に現われる場合がそれである。

(2) *There was a man behind the tree.*

これがさらに極端なかたちをとったのが、二種類の *there*、つまり、E. *there* (Existential *there*) と A. *there* (Adverbial *there*) が共に同一節中に同時に現われる存在文である。通例、次のような文を以て E. *there* の虚辞性を証明する典型的なものとする。

(3) *There is a dog there.*

以上、ここでは便宜上(1)の文型をとる存在文を A 型、(2)や(3)の文型をとる存在文を C 型と呼ぶことにする。A 型存在文はこのような 'NP+be' 文型による存在文の外に Loc. を文頭位に持つものでも inversion を伴っていないもの、さらに、数はきわめて少ないが動詞が単独で文頭位にあるものなどをこの範疇に加える。また否定辞 *Ne* 単独で文頭に立ち、V+S と続くパターンとは区別して、'Nis/Næs+NP' 型文も *be* 動詞文頭位と同類と見做し、この A 型構文に含めることにする。C 型存在文は上述のように、ここでは同一節内において *there* と Loc. とが同時に現われる存在文のみを直接の考察の対象とする。

中世英語における *there* 存在文の発達に関する研究は前述の Nagashima と Breivik があり、全体的な俯瞰図を得ることができる。特に Breivik の研究はその起源から、現代英語に至る広範なものである。しかしながら、前にも述べたように *there* 存在構文の発達の推移を辿るのに、肝心の *there* そのものの判定に際して文脈による以外は必ずしも明確な客観的基準があるわけではなく、当然、黒白つけ難い場合も少なくない。文脈による判断で充分である場合もあるが、他方、文脈をもってしても判然としない場合も多い。そこで Nagashima では疑問

1) D. Nagashima, 'Historical Study of the Introductory *There*, Part I, The Old English Period,' *Studies in Foreign Language and Literature* 8, 1972 ; —, Part II, Middle English Period,' 1974 ; 'A Historical Study of the Introductory *There*, Part II, The Middle English Period, Chapter II, Chaucer and Langland,' *Studies in Language and Culture* 2, 1976.

中世英語における There 存在文の発達*

杉 山 隆 一

1.0. はじめに

全体的にはほぼ現代英語に近い姿に落ち着く中世英語後期に比べれば初期中世英語では、すでに当時 'common' であった、次に示す(1)のような「主語＋述語」の文型に則った存在文が古代英語に引き続き一般的であるが、下って近代英語初期の、例えば Shakespeare あたりでは there 存在文が定着し、その構文の発達是一段落の状態となっている¹⁾。つまり、古代英語に発したこの there 構文は中世英語期にその一層の語順の固定化と相俟って大きく発達し、存在表現のひとつの定型となったと考えられる。

(1) A telephone was on the table.

There 存在文を考えると、大きな隘路となるのが、形態的にはほぼ同一の形と分布を示す副詞の there との識別の問題である。当然ながら副詞の there を文頭に始まる存在文は古くより一般的であり、また、それに対応する具体的な場所は文の前後に必ずしも明示されているとは限らない。Breivik の大著 *Existential There* においてもこの二つの there の判別に関わる問題はより効果的な解決方法もなく、自分の判断で明白であるとするもののみを考察対象とし、従って、そこに提示された頻度その他の数字は「一般的傾向を示すにすぎない」と断っている²⁾。また Nagashima (1974, 1976) でも疑問符付きの判定があちこ

* 本稿は第5回中世英語英文学会(1989年於東京大学)に於いて発表した論文の一部を基に加筆したものである。

1) Cf. 杉山隆一 'Function Word *There* in Shakespeare' 『鹿児島県立短期大学紀要』No.23 (1975)。

2) L. E. Breivik, *Existential There—A Synchronic and Diachronic Study*, Department of English, University of Bergen, 1983, p.275.